

2022年11月10日(木)

大学コンソーシアム京都
インターンシップ・プログラム
長期プロジェクトコース
プロジェクト報告書

特定非営利活動法人クリエイター育成協会

「インターン活動を振り返って」

2022年度 長期プロジェクトコース
インターンシップ生 一條 顯恆 橋本 渉

1. プロジェクト概要
2. 事業所について
3. 活動内容
4. 成果
5. 反省
6. 感想
7. 謝辞

1.プロジェクト概要

事業所活動や提携先企業様へ向けたインタビューを行い、社会における障害者雇用の現状について調査を行う。そして現状を踏まえ、更なる「障害者雇用の促進」を目指し活動を行う。

2.事業所について

実習先の特定非営利活動法人クリエイター育成協会さんは2008年に京都で発足し、Web/IT業界を通して、「教育」「福祉」「地域貢献」の3つを基軸とした人材育成支援や求職者への就職支援を行っている団体である。特に、WebデザイナーやWebディレクターといったWebクリエイターを目指しWeb専門学校やWebスクール等の教育機関を卒業された方や、就業訓練を修了された方、また、独学で勉強されセミナーや勉強会でスキルアップしたにも関わらず、実務経験がないために就職活動が難航している方々へ向けて、実務経験支援とその経験の場を提供し、人材を育成・養成することを目的としている。

そして、人々が社会の中で「福祉に頼らない自立を目指す」ことを理念として掲げており、従来のような福祉事業を目的とした活動ではなく、人々の社会的自立を目指した、教育的な活動を行っている。

3.活動内容

「障害者雇用の促進」を目指し、プロジェクト開始後の2022年6月～11月にかけて、以下の通り活動を行った。

- ①6～8月： 事業所活動を通して、事業所の実状を探る
- ②9～10月： 企業インタビューを行い、社会における障害者雇用の実状を探る
- ③10～11月： 成果物を作成する

前提としてインターンシップ開始当初、私たちインターンシップ生は、障害者雇用についての知識のみならず、支援所の種類や職員さんの役割、事業所の現状に関する知識までもが乏しかった。そのため、①の期間においては、主に事業所内で活動を行い、これらの把握と調査に努めた。

まずはじめに、事業所の利用者さんと交流を深めた。この時期、クリエイター育成協会さんは11月の展覧会へ向けて、自作スマホケースの作成や絵本の作成を行っており、その制作やミーティングに参加させていただいた。交流の中で、事業所の一日の流れや取り組まれている作業内容について把握することができた。

また、事業所の職員さんにお話を伺い、それぞれの職員さんの役割について理解した。現在事業所では、利用者さんの体調のチェックを行う生活支援員さんや、就職の専門家である就労支援員さん、働くための技術を教える職業指導員さんなどの専門性を持った方がご活躍されている。お話を伺う中で、クリエイター育成協会さんが、社会で輝ける人材の育成を目指されてることが特に印象に残った。

更に、事業所で開催されていた就活講座にも参加させていただいた。ここでは社会に出るまでの間に知るべき情報について、お聞きすることができた。いただいた情報については、これからの進路選択の際に活かしていきたいと考えている。

夏期休暇が終わりに近づいた頃（①→②の期間）、企業インタビューの計画とその準備や成果物の作成を進めていたが、それらの作業が難航してしまい、活動をあまり進展させることができなかった。特に成果物の作成の停滞については、活動開始時点の目的や目標の不明瞭さが原因であったように思う。

そして、当初の予定より遅れることとはなったが、②の期間の中で、合計4社の企業様へインタビューを行った。その具体的内容については、4章「成果」の中で記す。

最後に、③の期間で成果物の作成を行った。しかし実際には、成果物作成の時間を確保することができず、10月28日の事業所発表とコンソーシアムの発表へ向けたプレゼンテーションの作成を行った。よって今回、私たちはプレゼンテーションの他に、形の残る成果物を残すことができなかった。

4.成果

私たちは事業所における活動を通して、「就労移行支援所」の概要と活動内容の説明をお聞きし、利用者さんや職員さんと交流を深める中で、事業所の様子について知ることができた。また、利用者さんと交流する中で、「実践的で、なおかつスキルが必要な作業に取り組んでおられる様子」が印象的であった。現代は情報化によって、ホームページ制作やプログラミングのようなITに関わる人材に多くの需要がある。ⁱⁱそこで、その卓越したスキルを更に社会的に広めることによって、「企業へ障害者雇用を広めること」ができるのではないかと考えた。

それらを踏まえ、実際に雇用を進めていらっしゃる企業様へインタビューを行った。質問は以下の内容である。

1. 障害者雇用の導入に踏み切った理由
2. 障害者への配慮を行ったうえで、職場環境がどのように変化したか
(就職後に就労支援、定着支援があればその内容もお聞きする)
3. 受け入れについてどのような工夫をしているか
また、困ったことがあったときに相談できる環境はあるか
4. 採用を行う上で、障害者雇用に限らず大切にされていること
その他条件、試用期間、研修などを設けているか
5. 今後の障害者雇用に対しての展望、目標など
6. 企業の障害者雇用に関しての悩み、課題点
7. 障害者雇用に関する情報収集はどのように行ったのか
8. 本事業所の就労移行支援の話聞いて、
企業様が就労移行事業所との連携に対し、どのような認識を持たれているか
9. 障害者雇用がなかなか進まない社会に対して、どのような動きがあればいいか

質問の目的は、主に「障害者雇用の促進を図る上で、現状の課題などの洗い出しを行うこと」と、「事業所の支援について、企業様の意見を参考にすることで、今後の支援体制の改善に活かすこと」である。そして、以上の質問の具体的回答は、以下の内容となる。

1. 障害者雇用の適用内となったので、ハローワークから障害者雇用を持ち掛けられた。
新たな雇用形態をつくり、社員の定着を図りたかった。
2. 労働環境のチェックを強化、会議を増やすなどの、様々な見直しを行った。
3. 最初はマニュアルを作ることで手順を明確に示し、次第に順応させていく。
仕事をするときには、その方とだけやり取りする「サポーター」を配置する。
4. 試用期間は2~3ヶ月。(技能テストなどを通して)プログラミングに関する、最低限の知識を持っているか。自身がどのようになっていきたいか、という意識を持っていること。日々の小さなことを積み重ね、信頼を重ねること。
5. 障害特性があまりにもフィットしなければ、一般雇用を考えるかもしれないが、今後とも積極的に取り入れていきたい。
6. 障害者だけではないが、無理がさせにくい部分がある。
7. セミナーや障害者雇用を実施されている企業様のお話を聞いた。
8. 就労後に問題が発生したという事例を聞いたことがあり、その点については、事業所にサポートをしていただいているので心強いという認識。
9. 「お互いを知ること」が社会的に大事。

多くのご意見・ご回答をいただき、現状、障害者雇用を取り入れることが難しい企業様が多いことがわかった。その上で私たちは、「利用者さんのスキルや技量、能力を発揮する場が少ない」と思い、まずは「事業所活動の認知を広めること」が必要であると考えた。そして、社会福祉に関わる人や団体以外に向けて、支援事業所が、障害者について知る機会を広めるための活動を行うことで、事業所を知らない人に対しても、「障害者」の認知が広がり、結果として、彼らが抱く「障害者のイメージ」を大きく変化させることができるであろう。

その後、私たちは「就労移行」をテーマにしたポスターやリーフレットの作成を計画した。しかし、その頃には既にプロジェクトの時間的期限が迫っており、最終的には、その作成には至らなかった。

それでも、プロジェクトの最終発表会において、多くの方々に「私たちの活動」に関するスライドを実際に聞いていただき、「障害者雇用の認知」を広げることができたという点については、一つの成果であるといえるだろう。

5.反省

なぜ成果物が形に残せなかったかという問題であるが、私たちはプロジェクトを始めた時点から、「活動目標」と「具体的な成果として残したいもの」が明確に定まっていなかった。時間的な問題もあったが、これが最大の原因と言える。これは日常の生活にも言うことができる点であり、インターン活動を通して、「目標を立てて生活することの大切さ」を強く痛感した。

また活動の中で、社会的な課題として、就職希望者と企業の考える「理想的な人材」の間にギャップがあることを感じた。企業側のニーズである、「人間性のステップアップを目指す姿勢を持つ人材」の育成や就職希望者と企業の相互のニーズの理解のために、クリエイター育成協会さんが行われている教育的活動はとても有効であると考えている。今後は、このギャップの存在や支援機関の存在を、更に社会に認知させていく必要がある。

6.感想

橋本「可能性」に着目する

私は、はじめ、就労移行支援ってなんだろうという所から始まり、交流を重ね、イメージも変わった。「支援」という形をいろんな角度から見た上で、今度はみなさんのポテンシャル、「可能性」を後押ししたいなという気持ちになった。

知らないこと、興味のないことでも、まずは理解しようとする姿勢が大切ということを私は感じましたし、これは皆さんにとっても大切なことなのかなと思っている。

一條「障害」についての所感

活動の中で、とある利用者さんの「私は自分の障害を、障害とは感じていない。」という言葉が特に印象に残っている。この言葉を聞いて、利用者さんの不得意なことについてそれを「障害」と勝手に思い込み、その人を障害者として見ていたのは私自身であったことに気がついた。そして、障がいを持つ方を障害者として切り離しているのは、私たちであるのかもしれないと思った。

7.謝辞

私たちは今回の実習で、「社会を変えるためには？」ということについて考え直す中、事業所における活動を通して、たくさんの影響を受けました。

そして、企業インタビューなどの普段経験することができないような機会を設けていただき、改めまして感謝申し上げます。これらの経験と感じた反省を生かしながら、これからも日々成長していきたいと思っております。

最後となりますが、これまで関わっていただいた大学コンソーシアム京都の関係者の皆様方、コーディネーターの先生、そして、クリエイター育成協会の関係者の方々へ心よりお礼申し上げます。半年もの期間の間、本当にお世話になりました。

インタビューにご協力いただいた企業・団体様

- ・ 株式会社 F&I クリエイト様
- ・ 株式会社デジタルクリエーション様
- ・ 京都市立池田東小学校様
- ・ 株式会社アイリステクノロジー様

ⁱ 我が国における IT 人材の動向（経済産業省）

https://www.meti.go.jp/shingikai/mono_info_service/digital_jinzai/pdf/001_s01_00.pdf